

闘争の時代の余熱のなかで

— 森光子『春駒日記』の描く吉原遊廓の日常風景 —

山家 悠平

はじめに

今日だ、今日だ、今日より外に自分のこの運命の絆を断つ日はない。

自分を虐げた、あらゆるものに対する復讐の首途の日。

かと思うと妾は、自分ながら驚く程の緊張さが込み上げて来た。

神はきつと自分を守って下さるに違いない。十八本の注射も今日で終わり、もし今日打ってしまえば、もう一人で病院へは行かない。皆と一緒に何うしても逃げる事は出来ない⁽¹⁾。

一九二四（大正一三）年、家計をたすけるために吉原で働きはじめた春駒こと森光子は、病気で入院を繰り返したあと、母親の死がひとつの契機となって遊廓から逃走し、高名な歌人であった柳原（宮崎）白蓮のもとに身を寄せた。のちに労働運動家の岩内善作の協力で自由廃業⁽²⁾を遂げ、自らの経験を『光明に芽ぐむ日』——初見世から脱出まで——（文化生活研究会、一九二六年。以下、『光明に芽ぐむ日』と表記）で発表する。冒頭で掲げたのは、同書のエビログにあたる「脱出記」の森のモノログである。『光明に芽ぐむ日』は、文庫版の解説で斉藤美奈子が「第一級のノンフィクション」⁽³⁾と述べているように、森自身の経験に根ざした作品であり、これまで遊廓における過酷な生活についての当事者の証言として読まれてきた。

たしかに『光明に芽ぐむ日』では、搾取の実態や、一晚に十人近くも客を取り、常に病気の恐怖を抱えているという娼妓たちのリアリティが当事者の視点から克明に描かれている。新聞記事や廃娼団体の機関紙をのぞいて、取り上げられることのなかった娼妓自身の声を伝える史料としても非常に貴重なものである。しかし、森は、ただ事実を「記録」しただけなのだろうか。

たとえば、『光明に芽ぐむ日』は、最初から最後まで一貫して「×月×日」と

いう日付表記のあとに、その日のできごとが描かれるという日記の体裁をとっている。しかし、冒頭で紹介した脱出の朝の場面は、当然日記ではなく、ほとんど小説的ともいえる技法で書かれている。それどころか、『光明に芽ぐむ日』をていねいに読み込むと、日記を書くという行為自体が遊廓を生き抜くための手段として作品の冒頭で位置づけられ、その日記に描かれた様々な苦難を読み手は追体験し、最終的に脱出というクライマックスをむかえる、という一貫した物語的な構成をもっていることがわかる。楼主や周旋屋への復讐のために日記を書きはじめる場面は、つぎのような劇的なモノログである。

復讐の第一歩として、人知れず日記を書こう。

それは今の慰めの唯一であると共に、また彼らへの復讐の宣言である。

妾の友の、師の、神の、日記よ！⁽⁴⁾

その物語構造のなかで、読み手は、春駒、という遊廓のなかの女性の日記を読んでいるように感じさせられるが、実際には、森光子という書き手が描き出す春駒の「物語」を読むのである。いうまでもなく、作品に構成がなされていることは、『光明に芽ぐむ日』の記録的な価値を損なうものではない。ここで行いたいのは、森の優れたストーリーテラーとしての側面に光をあてるべきであるということだ。いったい森は、書くことを通してどのような世界を表現したかったのだろうかという問いが必要である。

そのような観点から、森の作品に言及した研究を見直してみてはつきりしたのは、実は森光子という人物や作品世界には、驚くほど関心がむけられてこなかったという事実である。そもそも森自身についての史料がほとんどないというところもあるのだが、遊廓に入るまえの森の経歴については、森自身が書いた『光明に芽ぐむ日』や『娼女界』（一九二六年七月号）に寄稿した手記にある説明——高崎の貧しい銅工職の長女として生まれ、啄木の詩集に親しむ少女時代を過ごす——がすべてであり、廃業後については外務省属吏の西野哲太郎と結婚したという数行程度の解説に留まる⁽⁵⁾。おそらく森について、史料の調査も十分にされていないのではないかと。

そこで、この論文では、まず廃業後の森の足取りについて可能な限り史料によって跡づける。結論を先取りすると、史料のなかの森の足取りは一九三〇（昭

和五 年で途切れている。しかし、今回の調査によってこれまであきらまかであった時期の消息が掴めたことで、二冊目の『春駒日記』（文化生活研究会 一九二七年）刊行の状況が少し浮かび上がってきた。

つぎに『春駒日記』に焦点をあてる。『光明に芽ぐむ日』は、公娼制度の廃止を求める世論が高揚し、遊廓からの逃走やストライキが頻発した一九二六年に発行され、当事者の告発の書として大きな話題になった。『春駒日記』はその翌年に発行されたのだが、同時代的にも、歴史研究のなかでもほとんど注目されていない。公娼制度をめぐる社会的な関心がやや薄れつつあったことに加えて、『光明に芽ぐむ日』に比べると作品としての統一感が乏しく、遊廓生活をめぐるエッセー集であることも、その注目の低さの理由であったのかもしれない。しかし、森自身が『春駒日記』の序文で「生活を偽らず、ありの儘に描いてみました」⁽⁶⁾と述べているように、遊廓の告発を主目的としていた前作よりも、はるかに多様な経験や感情が表現されている。

本論では、遊廓のなかの時間を、自分の言葉で整理しながら語り直すことが、森にとってどのような意味を持っていたのかという視点から、『春駒日記』に描かれる遊廓という空間と、そこで生きる女性たちの姿をていねいにみていきたい。

一、森光子の生きた時代

(一) 「闘争」の時代の寵児として

森光子が吉原から逃走した一九二六（大正一五）年は、公娼制度下の遊廓で働いていた娼妓たちにとって、特別な「闘争」の一年であった。簡単に時代背景を説明する。

一九二五（大正一四）年に日本政府は諸外国からの批判におされる形で、「婦人及児童の売買禁止に関する国際条約」（二二歳未満の女性の売春目的での勧誘・誘拐への処罰規定を含む条約）を留保条件つきで批准した⁽⁷⁾。同時期には、キリスト教者を中心とした娼妓運動も高揚し、全国各地で娼妓期成同盟が設立され、各県議会に對してさかんに娼妓建議提出運動が行われている。そのような背景のもとで、一九二六（大正一五）年五月、全国警察部長会議と地方長官会議において、「娼妓の待遇改善」という新方針が示された。森光子という人物がはじめて世間の注目を集めたのも、その頃のことである⁽⁸⁾。

森の吉原遊廓からの逃走は、『東京朝日新聞』（一九二六年四月二七日）で「白蓮女

史を頼って吉原を逃れ出た女／どうか私を助けて下さいと涙の身の上を打ち明けて懇願／長金花楼の『春駒』』という見出しの写真入りの大きな記事で報じられた（森は後ろ姿で、白蓮らが正面に写っている）。記事が伝える森の経歴をみていこう。森の逃走時の年齢は二一歳、群馬県高崎市赤坂町銅工職の長女として生まれ、高等小学校まで進学するが、一九二三（大正一二）年に父が亡くなると、一家は困窮した。病弱な母と「行状の悪い兄」、まだ幼い妹がおり、森は兄と相談のうえ吉原に行くことを決め、六年の年季、一五〇〇円の前借金で一九二四（大正一三年）の春から働きはじめた。

白蓮夫人の歌に共鳴するほどあって文学趣味が豊かであった。のろわれた生活の中から夫人の自由な生活態度にあこがれを感じた彼女は去年（一九二五年——引用者注）の秋頃から心ひそかに逃亡を思いはじめた⁽⁹⁾。

この記事が出た時点では、当然まだ森の著作は世に出ていないので、白蓮への憧憬や、文学を好きであるということなど、新聞記者が実際に森に取材して書かれた記事であるということがわかる。同僚の娼妓花山とともに逃走を試みるが失敗し⁽¹⁰⁾、その後一九二六（大正一五）年一月から梅毒と肺病と心臓病で二ヶ月半もの入院を余儀なくされる。借金も増え、体も手術で弱り切るといふ絶望的な状況で再度逃走を決意し、白蓮に手紙を書いた。最終的に、四月二三日の母の死が直接のきっかけとなって、四月二六日朝九時に医者に行くといつて長金花から抜け出したという。森の突然の来訪に白蓮は困惑するが、たまたまその場に居合わせた労働運動家の岩内善作の支援によって、森は自由廃業を遂げた⁽¹¹⁾。

森の逃走の三日後、再び『東京朝日新聞』が「公娼問題を掲げて松村警保局長の英断」という見出しで、警保局長が公娼制度の廃止も視野に入れて論議をすすめる、という記事を掲載した。警保局長の構想自体は、当然それよりも前から練られていたものであろうが、森は遊廓の改善という時代の象徴的な存在となったのである。同時期には、吉野作造や片山哲、山川菊栄といった知識人も公娼廃止を支持する論考を『婦人公論』に寄せ、森自身に関しても「白蓮夫人に救われた吉原の娼妓」（北山薫による森光子の紹介。『婦人公論』一九二六年七月号）、「春駒のはなし」（白蓮によるエッセー。『變態心理』一九二六年九月号）などたびたび雑誌で言

及されている。

六月になって警察が全国一斉に遊廓の実態調査をはじめると、警察署に不正の告発をしたり、ストライキという手段で状況改善を訴えたりする娼妓たちが続出する。『東京朝日新聞』をはじめとする大新聞も社説に公娼制度の廃止を掲げ、娼妓たちの行動を後押しした⁽¹²⁾。

そんな娼妓たちの「闘争」の時代の寵児としての森の評価を決定づけたのは、同年七月に雑誌『婦女界』に発表された手記「廓を脱出して白蓮夫人に救われるまで」である。手記のなかでは、困窮する家を救うため遊廓に入ったという経緯から、遊廓の詳細な生活記録や脱出の決意について詳細に綴られていた。何よりも世間の耳目を集めたのは、逃走した娼妓自身が、廃業に至るまでの経験を自らの言葉で書き記したということである。

本篇はその当人、森光子さんが、自分で事の顛末を詳細に手記されたものです。遊廓制度の残虐と、貪婪飽くなき楼主連の搾取り、そしてそこに棲む不幸な同胞達の目もあてられぬ生活を、裏の裏まで赤裸々に率直にブチまけて、世の識者に訴えたものがこの一文です。十七頁にわたる血涙の長編手記!! めざまめゆく無産階級者の力強い叫び声をお聞き下さい⁽¹³⁾。

そのように新聞に掲載された手記の宣伝文句でも当事者の手による作品であることが強調されている。同時に、当時高揚していた労働運動の文脈とも結びつけるような表象も行われている。

当事者が公娼制度に対して声を上げたことのインパクトは大きく、遊廓のなかにいた女性たちにも影響を与えることになった。実際に、遊廓で森の手記を読んだことを小説に描いた女性もいる。名古屋の中村遊廓で働いていた松村喬子は、一九二九（昭和四）年に『女人芸術』に発表した小説「地獄の反逆者」のなかで、主人公歌子に森の手記を読んだときの感激を「私達もやっぱり進む道はあった。救いを求むる処はあるのだ……決して、このまま死んでよいものか？」⁽¹⁴⁾と語らせている。松村も一九二六（大正一五）年九月に遊廓から逃走し、森の廃業に尽力した岩内善作の支援のもとで廃業した⁽¹⁵⁾。

さまざまな形で注目を集めた結果、森にはいくつかの出版社から体験記を書かないかというさそいがあったという⁽¹⁶⁾。「面白く書くと売れる」といった不倫

快な言葉をかけてくる依頼者もあつて躊躇したというが、最終的に「『婦人公論』を通して尊敬していた吉野博士や、徳富さんの方々のものを出版する書店」⁽¹⁷⁾である文化生活研究会から一九二六（大正一五）年二月に『光明に芽ぐむ日』は出版された。

（二）『光明に芽ぐむ日』から『春駒日記』へ

一九二六（大正一五）年二月二五日、『読売新聞』の一面に大きく『光明に芽ぐむ日』の広告が掲載された（図①）。新聞の題字よりも大きな広告には、安部磯雄による書評（『国民新聞』から転載）も付されていた。当時の一般的な書籍広告に比べても、きわめて目立つ大きな広告である。

『光明に芽ぐむ日』の反響に関しては、一九二七（昭和二年）十月発行の『春駒日記』に掲載された元同僚の千代駒からの手紙を通して間接的に知ることができる。千代駒のもとには『光明に芽ぐむ日』を読んで深く感動したという若い男性が本をもつて話を聞きにきたり（千代駒は噂で知っていた本をそのときはじめて手にしたという）、本に描かれた千代駒の顔を見たいという興味本位の学生が訪れりしたという。それだけではなく、悪く書かれた同僚ややり手が怒っていたことも手紙に書かれている。「ことに清川さんは気の毒です。あの本を読んだらって、妾の所に来た人は十人ばかりありますのに、あの人の所には一人も来ません。あの人の悪口がたたつたんでしょ」⁽¹⁸⁾という千代駒の言葉からは、同時期多くの人に読まれていたことがうかがえる。一作目の反響が、おそらく二作目の『春駒日記』の出版につながったのだろう。

『春駒日記』が出版された一九二七（昭和二年）の秋には、森は同じく廃業した松村喬子とともに公娼廃止デー（二〇月一七日）の公娼廃止署名活動に参加している。『廓清』（一九二七年二月号）は「全国婦人同盟からの応援として森光子さんや村松喬子さんなどという前に娼妓であつた婦人達が来られたので、我ら同志も大いに力づけられた」とその日の様子を伝えている⁽¹⁹⁾。松村との活動がいつまで続いたのかは判然としないが、『婦女新聞』（一九二八年二月三日）の松村への取材記事に「松村さんは、今春駒の森光子さんと一緒に、娼妓の自覚を促すため、解りいいパンフレットを書いて、彼女等の許に送る計画を立てている」と答えているのが確認できるので、少なくとも一九二八（昭和三年）初頭までは一緒に活動していたことがわかる。



図① 『読売新聞』1926年12月25日掲載広告

森と西野についての続報は『読売新聞』（一九二九年八月三日）の「縁は異なもの何が二人を結んだか」という連載記事に登場する（前日には松村喬子が紹介されているので、松村からの紹介だろうか。その記事に掲載された肖像写真が、現在確認できる唯一の森の近影⁽²³⁾である（図②）。記事によるとふたりは当時印刷所の一室を間借りし

ところで、その頃、森の人生は大きな変化を迎えることになる。西野哲太郎という人物との結婚である。一八九五（明治二八）年生まれの西野は森の十歳年上で、原籍は茨城県多賀郡にあり、一九二一（大正一〇）年から外務省で働いていた⁽²⁰⁾。一九二四（大正一三）年に省内の試験に合格し、一九二五（大正一四）年八月から外務省翻訳課に勤めていた西野は、史料によって多少の時期の相違があるものの、一九二七（昭和二年）春頃に森と結婚し、『春駒日記』の出版に尽力したという。しかし、婦人雑誌に「若手外交官と結婚したる春駒の家庭を訪う」という記事が出たことで（記事の存在は未確認）、一九二八（昭和三年）五月に外務省を追われた。無産党に入党し森とともに廃娼運動に取り組み、とも記事は伝えている⁽²¹⁾。廃娼団体の機関誌『廓清』にも西野の外務省からの罷免に関する記事が出ており、そこでは「妻光子さんを頼って、飛び込んで来た洲崎や、吉原の娼妓、あるいは白蓮夫人の手許に逃れて来た地方の芸娼妓を十数名、君の手で自由の身体にしてやった。ところが楼主側から役人として怪しからんと抗議があったので、課長先生震いあがつてさこそ西野君の免職となった訳である」⁽²²⁾

とも紹介されている。間接的にはあるが、森が廃業を求める娼妓たちにとつてひとつの希望になっていたということがその記述からは読み取れる。

ていたという。西野の名前が「鐵太郎」となっていたり、出身地が群馬になっていたたり、必ずしも正確とはいえない記事だが、『春駒日記』（ほかの史料と照らし合わせるとおそらくは「光明に芽む日」の誤りと思われる）を読んで感銘を受けた西野が知人の宮崎龍介を通じて結婚を申し込んだ、という二人の接点が述べられている。記事の中でひとつ目を引くのは、結婚の申し入れを受けた当方を回想する森の言葉である。

将来の希望——それは私と同じ境遇にいる同性を救いたい、自覚を与えたい、そして私は自分のなめて来た苦しい経験をそのまま小説にし、また遊廓などというものの内部のカラクリを暴露して、世間の人々に見せてやりたい——そうした希望も持っていましたので、私のそういう仕事を遂げさせてくれればと申しますと、もとより大に賛成だし、ゆつくり勉強させてやる。——自分も貧しい職工から勉強して来たのだから——とこう申してくれますので再び男に接しまいと思っていた私も気持ちを曲げて結婚致しました⁽²⁴⁾。



図② 『読売新聞』1929年8月23日

かつての自分と同じように遊廓のなかにいる女性たちを救うのと同時に、小説を通して遊廓の内部や自分自身の経験を描きたいという。ほかの記事にあるように二人の結婚の時期が『春駒日記』発行前の一九二七（昭和二年）春頃だとすると、ここで回想されている内容は、『春駒日記』執筆の動機の一部とも読める。あくまで記者が編集可能なインタビューなので確定的なことはいえないが、森が「小説」という言葉を用いているのは注目に値するように思われる。

（三）歴史の闇のなかに

そのように一九二六（大正一五）年と翌年に二冊の本を書き、一時期は社会的に強い関心を集めた森だが、史料のなかの足取りは、冒頭でふれたように一九三〇（昭和五）年で途切れている。最後に森の消息を伝える『新青年』（一九三〇年八月号）の「何処へ行く 杉山さと子・北里氏・春駒諸君の行方は？」という記事によると、森はその頃プロレタリア作家貴司山治の高円寺の家の二階に西野と居候していたという⁽²⁵⁾。そのときも西野はまだ失業中で「いくらカドン・キホーテ式なところがあつて、いつまでたつても就職しない。赤貧洗うが如き生活難である」⁽²⁶⁾と揶揄されている。いわゆるゴシップに類する記事なので、必ずしも正確ではないかもしれないが、貴司山治宅に居候していたというのは、貴司の回想記にも確認できるので、おそらく間違いない⁽²⁷⁾。

森のそれ以降の状況は現在まだわかっていないが、西野については、いくつかその後の記録が残っている。一九三一（昭和六）年三月には、中国の大学の卒業生を連れて吉野作造のもとを訪ね、帝大の大学院への紹介を依頼している⁽²⁸⁾。西野の友人と新聞記事で書かれていた宮崎龍介は、一九二六（大正一五）年に吉野や安部磯雄と独立労働協会を結成しており、おそらく宮崎の紹介等があったと推測される。吉野の日記には統報が記されていないので詳細はわからない。また一九三二（昭和七）年と翌年の『日本新聞年鑑』の国民新聞社社会部の欄に西野の名前を確認することができる⁽²⁹⁾。そのつぎに記録に西野の名前が出てくるのは、一九三四（昭和九）年のスワロフ号金貨引揚会による投資詐欺事件をめぐるものである。同会で事務員を務めていた西野は詐欺容疑で取り調べを受け⁽³⁰⁾、一九三八（昭和一三）年二月に四年間の執行猶予付きではあるものの有罪判決が確定している⁽³¹⁾。もし、森がそのときも西野と生活をともにしていたとしたら、森が望んでいた平穏な日常とはいいいがたいものであっただろう。しかし、投資詐

欺について報じる記事のなかには、森の情報はない。その後、戦後になって貴司山治の一九五七（昭和三二）年九月八日の日記のなかに「前の細君とはすでに十数年前に別れて」⁽³²⁾という記述があるので、いずれかの時点で離婚していたのは確かである。

今後、雑誌史料や地方新聞などのデジタル化が進み検索が容易になれば、一九三〇（昭和五）年以降の森の消息がもう少しあきらかになるかもしれない。

二、『春駒日記』という作品をめぐる

（一）森の著作と先行研究

ここまで現在みつかつている史料のなかに森光子の足取りをたどってきた。廃業後の森は、遊廓の改善をめぐる高揚する世論を受けて、『婦女界』に手記を寄せ、同年には『光明に芽ぐむ日』を発表した。二冊目の『春駒日記』は、西野哲太郎との結婚後、無産婦人運動に参加するなかで発行されたということも確認することができた。

『春駒日記』に焦点をあてるまえに、まず、現在みつかつている森光子の全著作と先行研究について簡単にふれておく。森が発表した文章（あるいは森に取材して書かれた記事）は、確認できるだけで以下の七本である。

- ① 「廓を脱出してから白蓮夫人に救われるまで」『婦女界』（一九二六年七月号）
- ② 「吉原病院日記」『婦人公論』（一九二六年一月号。『春駒日記』に収録）
- ③ 「夕霧さんの恋」『世界』（掲載誌未確認。『春駒日記』に収録。同書の序で『世界』に掲載されたと言及）
- ④ 「光明に芽ぐむ日 初見世から脱出まで」文化生活研究会（一九二六年）
- ⑤ 「光明に芽ぐむ日 遊女的生活記録を著して」『読売新聞』（一九二六年二月一八日、一九日、二〇日。三回にわたる連載）
- ⑥ 『春駒日記』文化生活研究会（一九二七年）
- ⑦ 「縁は異なるもの（八）」『読売新聞』（一九二九年八月三日。インタビュー記事）

以上のうち、『光明に芽ぐむ日』と『春駒日記』に関しては、著作権継承者不明のまま二〇一〇年に朝日文庫から再版されている。それまでは、『光明に芽ぐむ日』は谷川健一編『近代民衆の記録三 娼婦』（新人物往来社、一九六八年）に収録

されたものか、古書店で入手するはかなかった。『春駒日記』は高良留美子、岩見照代編『女性のみた近代Ⅱ 女性と労働(三)』(ゆまに書房、二〇〇四年)で復刻されている。

それらの文庫や復刻版には一応の作品解説が付けられているが、それは当時の公娼制度の過酷な状況への言及や、森の経歴、作品紹介に留まるものである。森の作品を文学研究の対象として取り上げた論文も管見ではみつからなかった。一方で、森の本が発行された当時の娼婦運動家の著作や、後年の歴史研究のなかで『光明に芽ぐむ日』は、遊廓の残酷さを示す証言として紹介されている。娼婦運動家の伊藤秀吉は『紅灯下の彼女の生活』(実業之日本社、一九三二年)で、『光明に芽ぐむ日』から、梅毒で死んだ娼妓力弥の話しや大震災のエピソードを長文引用し、「之を一片の小説と見てはならぬ。恐らくは事実談であろう……識者は此中から娼妓生活の如何なるものなるかを看取するのである」⁽³³⁾と論じている。紀田順一郎の『東京の下層社会』(新潮社、一九九〇年)ちくま学芸文庫、二〇〇〇年)も、多くの頁数をさいて『光明に芽ぐむ日』の要約と引用を通して、遊廓の残酷な搾取システムについて説明している。「当時の娼妓の過半数がまったくの無学歴か小学校中退のため、手紙一通満足に書けなかったという状況から見れば例外的な存在」⁽³⁴⁾、「文章を書くという行為の困難性は想像以上のものがあつたろう――生命の危険さえ覚悟しなければなるまい」⁽³⁵⁾というふうに、森が遊廓のなかでも特異な存在であつたこと、遊廓でものを書くことの困難が強調されている。ただし、一九二七(昭和二年)に行われた草間八十雄による吉原の娼妓六八一名の調査によると、無就学者は九二名で、尋常小学校五・六年から高等小学校在学の学歴を持つ女性が全体の半数近い三〇六名いるので、簡単な読み書きであればおそらく問題なくできただろうと考えられる。森も高等小学校卒業という学歴なので、決して高学歴とはいえない⁽³⁶⁾。

いづれにしても、『春駒日記』に関しては、二〇〇四年に復刻版が出版された際に付された詩人の渡辺みえこによる解説をのぞくと言及した研究はなく、そのほかの森の作品に関しても遊廓における過酷な経験の証言としての紹介に留まる。そこでは、当事者による告発という一面的なイメージが支配的であり、森の人物像や作品世界を読み解こうとする関心がそもそも乏しかったのではないかとということが指摘できる。前章でみたように、森の人生は遊廓を離れた後も続いており、『春駒日記』執筆時は、西野哲太郎との結婚や無産婦人運動への参

加など「新しい生」への転機だったことは、留意しておく必要がある。

(二)『春駒日記』の構成

『春駒日記』の序文によると本のタイトルは、『光明に芽ぐむ日』と同じく、社会運動家の賀川豊彦がつけたという⁽³⁷⁾。『光明に芽ぐむ日』と比べると、会話文以外の一人称が「妾」から「私」に変わったことや、日記の体裁を離れたことなどいくつか変化があるが、もつとも大きな変化は、遊廓の告発というテーマがやや背景化し、森が遊廓で過ごすなかで経験したさまざまな出来事を、文体を工夫しながら描いていることである。

同書は二七のエッセーからなる。後半の五つのエッセーは、『光明に芽ぐむ日』にもしばしば登場した仲のよかつた同僚の千代駒からの手紙をそのまま掲載したという。それぞれの章のタイトルと内容の概略はつぎのようなものである。

- ①「新駒花魁の逃亡」。公休日に一緒に外出した「変人」新駒の逃走を描く。
- ②「甚助お客」。嫉妬深い客にさんさんお金を使わせたというエピソード。
- ③「何が彼をそうさせたか」。恋にやぶれた早稲田商科の学生が中国に行くまでの交流を描く。

- ④「島田嘉七」。撮影所勤務を自称する嫌な客とのやりとりを描く。
- ⑤「ある一夜」。同僚の清川と客を対応に追われた晩のエピソード。
- ⑥「刺青」。客に「山田」という入れ墨を腕に彫られてしまった同僚の話。
- ⑦「五円のお客」。同僚の小紫とむかえた親切な二人連れ客の話。
- ⑧「意地悪花魁」。「大きな口に悪いほどの金菌」の松島という花魁を描く。

く。楼主すら脅す娼妓。

- ⑨「喜劇役者」。浅草〇〇館の女形の客。「同じ女」と信じるが裏切られる。
- ⑩「廓の恋の悲哀」。仲のよかつた同僚大巻の恋と切ない別れを描く。
- ⑪「夕霧さんの恋」。「世界」掲載原稿(掲載誌は未確認)。朋輩夕霧の進展しない恋を描く。

- ⑫「牛太郎」。長金花では雇い人が次々に解雇されるという短いエッセー。
- ⑬「やりて婆の失敗」。軍人のお客にふっかけて怒られたやり手の話。
- ⑭「ある馴染み客」。早稲田商科の好きだった学生の話。就職した北海道から手紙をくれる。

⑮「早川雪洲の兄」。黄色いお経の本を持ち、いつも二円しか払わない変な客の話。

⑯「吉原の遊び」。三井物産の増田とその連れに関するエピソード。

⑰「美術学生の狂言」。夕霧から森に乗り換えた客にさんざんつらくあたる話。最終的に客は満州に行ってしまう。

⑱「吉原一の花魁」。同僚の力弥の豪快さを描く。最後は逃げられたお客の田中に同情している場面で終わる。

⑲「娼妓の出世」。吉原病院入院中に会った千住遊廓の千鳥の悲劇を描く。

⑳「女の花魁買い」。夫婦連れの客との対話。夫は同僚の照葉と部屋を出て、森は妻と話す。

㉑「吉原病院」。『婦人公論』掲載原稿に加筆。リアリティ溢れる病院生活の記録。

㉒「崩れんとする吉原」。元同僚の千代駒が脱出した報告と手紙。以後、脱出前の手紙四通、脱出後の一通が掲載される。

㉓「地獄で仏」。千代駒が『光明に芽ぐむ日』を客から受け取ったという話。

㉔「遊蕩学生の醜態」。いやな学生の客に一步もゆずらなかったという話。

㉕「腕は細くも」。長金花の娼妓たちが森の本に怒っているという話。遊廓に広がる波紋。

㉖「忍従から反抗へ（娼妓のストライキ）。大喪中のストライキの報告。

㉗「千代駒さんの復讐」。千代駒の脱出記。

序文で森自身が「お約束の時期が切迫したために、この記録を統一することのできなかったことを誠に残念に思います」⁽³⁸⁾と書いているように、同書の内容は同僚や客に関する雑多なエピソード集という印象が強く、『光明に芽ぐむ日』のような一貫した物語性はない。

ひとつだけ象徴的な作品をあげておく。同僚の進展しない恋を描く「夕霧さんの恋」である。詳しくは後述するが、『光明に芽ぐむ日』でも同僚千代駒のほかに恋のエピソードが語られていたように、森にとって遊廓の恋を娼妓の視点から描くことは大きなテーマである。ただ「夕霧さんの恋」がなぜ象徴的なかという点、森が物語の語り手となり、一度も一人称の「私」が登場しないからである（森自身が登場しない）。

夕霧さんは、小柄なちよつと粹な女で、今年二十四だが、地味なつくりのせいか年よりも三つ四つ老けて見えた。あまり顔立ちのいい女という程でもないが、調子の好い口のききっぷりや睫毛の長い、大きな黒みがちの瞳は人の心を惹きつけずにはおかなかった。

彼女の島田がいつもちよつと横に傾いているのや、前髪と鬢の格好の何となく仇つぱい風情には誰しも惚れ惚れとさせられるのだった⁽³⁹⁾。

小説の登場人物のような夕霧の描写は、森が『光明に芽ぐむ日』においては自らに課していた「記録者」という位置を離れて、ひとりの創作者として遊廓のなかに生きる女性を描こうとする確かな変化を感じさせるものである。

（三）執筆の動機

『春駒日記』に収録された作品について、森自身はどのように説明しているだろうか。序で森は「一日も早く自由な身になりたい一念から、浅ましい稼業そのものに、ひたすらいそしんでいた時分の生活を偽らず、ありの儘に描いてみました……これを暴露する事によって、遊女生活の惨めさを、より深く知って戴き、不幸な私達姉妹の為に、心ある皆様の御情にすがりたい一念から、未熟な筆を走らせて、この『春駒日記』を臆面もなく出す事にいたしました。ほんとに恥さらしでございますが」（傍線強調引用者）⁽⁴⁰⁾と執筆の動機を書いている。自分自身の遊廓のなかでの生活を偽りなく描くことで、遊女生活の悲惨さを世に問うのが目的であるという。ただしすでに前節でふれた「夕霧さんの恋」の例にあきらかなように、ここで語られる作品の意図と、実際に描かれている内容とは乖離がある。

その背景には、娼妓が社会的に発信するということに対する差別と、森自身に過去にふれることに対して抱いている心理的なハードルといった問題があるように思える。まず差別に関しては、娼妓による告白文学の嚆矢である和田芳子『遊女物語』（三芳屋、一九二三年）が話題になった際に、「そもそも遊女売女は陰のものであつて、自己が生活の範囲外、すなわち社会に向かつては人並みの交際が出来ず、社会の人から排斥さるるのであるから、自己の身分と業体とを省み、多少謹慎せねばならぬ」といった、いわば身の程をわきまえよという批判が行われている⁽⁴¹⁾。そのときから時代は進んでいるものの、一九二六（大正一

五)年においても『岩手日報』に掲載された娼妓の投書に「世間に私達の味方がない」⁽⁴²⁾とあるように、世間からの偏見や無理解は、遊廓のなかに生きる女性たちにとって共有の感覚であつただろう。前作においては、社会的な告発という目的が明確であつたからこそ、娼妓が経験語ることも「許される」が、ただの日常の告白は「不謹慎」である――そのような視線を意識しているからこそ森は、「浅ましい」「恥さらし」といった自己を卑下するような表現をエクスキューズとして頻繁に繰り返しているのだろう。

かつての自分自身の生活を語ることへの心理的な負担については、『光明に芽ぐむ日』のあとがきでも言及している。森は「只今は、その当時の妾に、ふれたくないようなこともございますから……やがて晴々しい気分にならなければ、ゆっくりと書きたいと思っております」⁽⁴³⁾と記している。ここでいわれている「その当時」とは、遊廓のなかで過ごした時間のことである。なぜ、「ふれたくない」のか。『春駒日記』の序には、よりはっきりとした説明がある。

自分の身辺記録を書く事は、他人の生活を描く事よりも容易だったのですが、併し、私としても、あの当時はたとい暫くの間でも廓生活の自分にふれたくなかつたのでした。盗品におびえる盗人の心もあんなものでしょうか。それに私は、主として公娼制度を皆様に訴えたかったのでございます(傍線強調引用者)⁽⁴⁴⁾。

ここで用いられている「盗品におびえる盗人」という比喻を字義通りにとれば、森自身は、娼妓として生きた自らの経験自体を後ろめたく、罪の意識をもつてとらえている、とも読める。遊廓での経験は、「盗品」のような、たとえ持つてはいてもひとに見せることのできないものである。それをあえて語るのには、「遊女生活の惨めさを、より深く知って戴き、不幸な私達姉妹の為に、心ある皆様のお情にすがりたい一念」からである――しかし、そのような森自身の序における説明とは対照的に、『春駒日記』に描き出される遊廓に生きる女性たちの世界は、「惨め」や「不幸」といった言葉だけでは表現できない広がりをもっている。次章に詳しくみていこう。

三、『春駒日記』が描き出す遊廓の日常風景

(一) 客や同僚とのさまざまなコミュニケーション

「身売る」「女を買う」といった慣用法にも顕著なように、遊廓という場所とは通常金銭によつて性(行為)の取引が行われる場所としてイメージされる。たしかにそれはそうなのだが、森が『春駒日記』で描き出すのは、娼妓と客の間にあるのは性行為だけではないというきわめてシブブルな事実である(そこには性的な描写が検閲の対象になるという事情もあるだろう)。

「何が彼をそうさせたか」というエッセーのなかで、森は恋に破れた早稲田商科の松澤という学生に請われてしばしば賛美歌をともに歌う。

「君、賛美歌知っている? 『みのれる田のものは見渡す限り』あれを僕に唄ってきかせてくれんか。僕はあれを女の細い声で聞きたいと思つてたんじゃ。」

彼はしきりに唄えとすすめた。私も賛美歌が大好きなので彼のいうなりに唄つた⁽⁴⁵⁾。

「今日はお金がないから、一時間だけ話して帰る。すまないけれど。」
彼は三円出した。

「今日は一緒に賛美歌を歌おう。だが、こんな所で歌うべきものでないから、君もお祈りし給え。」⁽⁴⁶⁾

「君、もう最後のお別れじゃ。いつもの賛美歌を二人で歌おう。そして別れよう」⁽⁴⁷⁾

下宿の本や浴衣から時計まで質に入れて森のもとに通い続けた松澤は、最終的には自らの身の上話を森に打ち明けて中国に渡ってしまう。その身の上話はずきのようなものだ。クリスチャンである松澤は、地元九州の教会で中学時代に出会った文房具店の娘と将来を約束していたが、大学の卒業を待たずにその女性は親に無理強いされて結婚してしまったという。森は、棲から立ち去る後ろ姿をみて「何という淋しい姿なんだろう。私はそう思つたとき、涙ぐましいような感じがするのだつた」⁽⁴⁸⁾とも書いている。もちろん客との関係はあくま

で金銭を媒介したものであるのは大前提なのだが、森が描き出す松澤との関係の中心には、賛美歌を歌うという行為と、かすかな共感のようなものが存在している。

ほかのエッセーのなかでも歌や詩といった芸術が、森と客との関係のなかで重要な位置を占めていることが描写される。「ある馴染み客」というエッセーでは、やはり早稲田の学生である内山との歌や詩を通じた交流を描いている。「内山さんは早稲田の学生で歌や詩が上手だったので私は好きだった……内山さんがよく来る時分、歌合せをやらと歌が上手になると教えてくれた。それから来る度に一生懸命歌合せをして遊んだり、歌を書いておいては、来る度に見てもらったりしていた」⁽⁴⁹⁾。吉原病院に入院中の経験を描く長編エッセー「吉原病院」では、入院している森に音符を差し入れる同僚の馴染み客のエピソードも登場する。「手紙と一緒に清川さんの馴染み高橋さんから、『君よ知るや南の国』と『春の夢』の音符が届いた」⁽⁵⁰⁾。清川という娼妓は森が親しくしていた娼妓として『光明に芽ぐむ日』にも頻繁に登場しているが、その清川の客が入院中の森のためにわざわざ楽譜を届けたというのである。

ほかにも客からのさまざまな差し入れに関する描写がある。入院中に受け取った千代駒からの手紙には、「昨夜沢田さんから電話がかかったので、色々私がわけを話したのよ。そうしたら大変心配していらっしやったわ。その内にお金を送るからって。それから、どんな物を送ったらよいかと聞くから、パイナップルの缶詰にカステラ位のものだといったら……」⁽⁵¹⁾と森の馴染み客から差し入れについての相談があったと書かれていた。結局、その澤田という客からは、啄木詩集の第二巻と『改造』の新年号とお金が届いたという。

描き出される客のなかには、娼妓との性行為を必ずしも重視していないように見える客すらいる。「五円のお客」はいつも二人連れで遊廓にくる運転手の客のエピソードである。同僚の小紫と森でその二人の相手をするのだが、ある晩小紫の体調が悪くなったことに気づいた二人は寝巻のまま外で懐炉を買ってきてくれたという。「男に似合わない、ずいぶん親切な人だと私は思った、よくそんな所に気がついたと感心した」⁽⁵²⁾。

二人はさっぱりしている人達だった。

「忙しければ、俺達の所なんか来なくもいいよ。」

いつもいつていた。男同志と一緒に寝て帰って行く事は度々あった。それでも来る時になるときと来た。すっかり馴染みになった。

「今夜は忙しいから来れないわよ。」

といって放って置ける様になった。それで少しも怒らないで、機嫌よく帰った……小紫さんはこの二人が来なくなった当時は自分の一番大切なものでも失った様に口惜しがって、毎日口癖の様にいつていた⁽⁵³⁾。

それらのさまざまな客とのやりとりを描くエピソードが伝えるのは、客が遊廓に求めてくるのは、性行為だけではなく、馴染みになった娼妓たちとの対話や歌などさまざまなコミュニケーションだということである。それは、遊廓で働く娼妓たちの側からみれば、遊廓における労働が、きわめて複雑で高度な接客業であったことも意味している。森の描き出す世界のなかで、森も含めて娼妓たちは、客の話しを聞いたり、相づちを打ったり、ときには歌を歌ったり、自らの身の上を打ち明けたりしている。そのように深い精神的なコミットメントを必要とされる労働であるからこそ、そこには必然的に人間的な交流が生まれてくる。前借金による拘束や病氣といった過酷な環境であったからこそ、様々な人間的な感情のやりとりが、描きたい印象的な出来事として思い出されたのだろう。

(二)「手に負えない」女たち

森が描く娼妓たちのなかには、楼主をやりこめる娼妓も多く登場する。「新駒花魁の逃亡」というエッセーで語られるのは、新駒という変わり者と評判の娼妓をめぐるエピソードである。新駒は、小言をきかされると着物をまくって、太ももを叩き「ぐずぐず言いやがると、逃げっちゃうぞ」⁽⁵⁴⁾と口癖のようというのだという（実際に逃げた。また、森とも仲のよかった大巻という娼妓の恋を描く「廓の恋の悲哀」では、大巻の様子を「少しでも気に入らないことがあるとすぐすて寝をするのがくせだった。時によると一週間も二週間も休んでいた」⁽⁵⁵⁾と描写する。

なかでも強烈なのは、「意地悪花魁」で描かれる松島である。その題名通り森は松島に対する嫌悪感を隠そうともしない。「松島花魁といえど誰しもまるで毛虫にでもさわる様な感じを持っている意地の悪い花魁だった」「何てあくどい

意地悪そうな顔なんだろう。』こう思ったのが私が始めて彼女に対しての印象だった。『当時彼女は二八歳だった。彼女のしゃくれている顔、低い鼻、つり上がっている細い眼、悪どいほどの大きな口、彼女の容貌はちょっと見てもいかにもいじ悪さを物語っていた』⁽⁵⁶⁾。その松島に対しては、楼主すらお手上げであったという。松島が休業届を出し、父親と帰っていき、いつまでたっても楼には戻らなかったというところでエッセーは終わっている。

「吉原一の花魁」で描かれる力弥もまた強烈な印象を残す。力弥は三一歳で中肉中背、「ちよっと見るとにぎやかな顔をしているが、なんとなく凄みを帯びた目をしている」⁽⁵⁷⁾。自分のことを「おれ」と呼ぶ。貧しい家に育ち一八歳で男にだまされ転々とし、三〇歳ではじめて娼妓になるという波乱の人生を送っている。松島と違い森は力弥には好意を寄せていたのか、その描写の視線は優しい。

力弥さんは長い間ある魔窟にいた。そうして第一に、行った先の主人と関係を結び、最後には大金を巻き上げてしまう。そうした事が力弥さんには常習の様であった。それなのでひと所にいつまでも居る事はできなかった。どこへ行っても一ヶ月と経たないうちに借金を踏み倒して出てしまう様なやり方だった。又巻き上げるばかりでなく、もつとひどいになると力弥さんは料理屋を三軒もつぶしてしまったそうである。いつも口ぐせの様に、

「金持からはどんどんふんだくれ」

といっている。そして力弥さんはあらゆる金持、男は敵の様に思っている。しかし力弥さんは、何でも金持からは巻き上げてしまうという様なやり方をしている人ではあるが、そうかといつて、そうしたお金で着物を作ったり、贅沢をするというのではなかった。困っている人にやったり、みんなにぱっぱとやってしまうのだった⁽⁵⁸⁾。

最終的に、力弥は長金花の楼主の息子（揚屋町の支店長）に身請けされるが、その後きれいに手を切って、待合の女将になっているという。エッセーは、森が、力弥が去ったあとの長金花で、力弥の馴染み客の田中の愚痴をきき、居所を伝えてあげたいような、申し訳ない気持ちを出しているというモノローグで終わる。だが、タイトルの「吉原一の花魁」にもあきらかなように、森はエネル

ギーに満ちた力弥の姿をきわめて肯定的に描いている。

森は、そのほかのエッセーでも、楼主の圧倒的な権力にもひるまず、休んだり、不平をいったり、ときには遊廓から離れてしまう力弥のような娼妓たちの姿を徹底して描き出している。そこでは、娼妓たちは、廃娼運動家が描くような非力な存在ではなく、さまざまな方法で自らの道を切り拓いている。自ら道を切り拓くという意味では、娼妓であることを「選ぶ」女性すら登場する。前述の「廓の恋の悲哀」に登場する大巻は、すでに多くの店を渡り歩いて来た娼妓である。一五歳で芸者として働き始め、身請けしてくれた相手が同棲四ヶ月目に肺の病で死去したときに、決まった夫は持たないと決意したという。

「妾が少しせい出して働けば、五百や千の金は一年たたなくてもきつとぬいて見せる。」

彼女はいつも口ぐせの様にこういつていた。それには彼女は如何なる客でも牽つける自信があるからだ。けれど彼女は他の花魁達と一風変わっていた。早く借金なしをしてこうした社会から足を洗うという心は更になかった。

「妾はみんなの様にあはしてあくせく働く気になれないわ、馬鹿馬鹿しい。妾はね、一生こういう生活をするの、面白くね、だけど、一所にじっとしてちゃ面白くないわ、妾ねこれからものんきに方々とび歩いて見るつもりよ。それにどうしてみんなはあんなに借金ばかり苦にしているんだろう、妾おかしくてしょうがないわ。」⁽⁵⁹⁾

序で、「遊女生活の惨めさを、より深く知って戴き、不幸な私達姉妹の為に、心ある皆様の御情にすがりたい」と書いた森からすれば、一生娼妓の暮らしを続けたいという大巻はそのイメージにそぐわないはずだが、このエッセーのなかの大巻の描写はきわめて好意的である。「大巻さんはここへ来てから最初の印象の人だった。ほんとうに無邪気な人だった。私は彼女が物をいったり笑ったりする時の顔が何ともいえない程好きだった」⁽⁶⁰⁾。つまり、すでに前章でもふれたことだが、森が同書の意図として「外向き」に説明していることと、実際に描きたい経験との間には乖離があるということがこの大巻をめぐる一連の描写からもわかる。

最終的に、金払いの悪い客に恋をした大巻は、同僚から嫌味をいわれるのを避けるように品川に住み替えてしまう。棲を移ってしまったからは「あれ程仲のよかった彼女」からの連絡が途絶えた。もう会えないというさみしさと、親しかった森にも本心をあかさないまま去って行ってしまった大巻への静かな憤りが、森にこのエッセーを書かせたようにも思える。それでも、「今大阪の遊廓にいと風のたよりで聞いている」⁽⁶¹⁾という締めくくりの一文は、大巻が自らいつていた通りに様々な土地で生き抜いているのを、まるで喜んでいっているようである。

(三)「恋」を描くこと

森自身の恋愛観や結婚イメージが書き込まれているのもひとつの特徴である。とくに客との会話場面を使って、森は自分自身の考えを注意深く表現している。たとえば、「何が彼をそうさせたか」では、森の恋愛観が松澤との対話のなかで浮かび上がる。松澤に、女は将来を考えて経済的に裕福な方へ行くのだろう、といわれたことに反論として、森は「恋人同志が無一物でお互に苦勞して苦勞をしぬいてきづき上げた生活こそ、それがほんとうの生きがいのある生活だ」と思いますわ。で、妾は変わっているかもしれませんが、精神的に満足を得られる結婚ができなければ結婚なんかしない方がましだと思つてますわ……妾は誰がなんといつても、自分の思う様に進みますわ。そういうあなたこそ、金持なんですよ。そして大学へ行つていて。あなたなんか妾の気持ちがわかりつこないわ」⁽⁶²⁾と答えている。ここで描かれる結婚観が、森が長金花にいた当時からもつていたものか、執筆時である一九二七（昭和二年）（ちょうど森が結婚をした年でもある）のものかはわからないが、読み手に表現したい自己イメージであることは間違いないだろう。

ここでは森自身の台詞として描かれているが、前節でふれた「廓の恋の悲哀」のなかでは、大巻の恋をめぐるエピソードを通してほとんど同じような恋愛観が大巻の言葉のなかで提示される。肺の病で亡くなった初恋の相手に生き写しの客に入れあげた大巻は、「妾ね、物質にとらわれているようじゃその人に対してほんとの恋は得られないと思うの」⁽⁶³⁾といい、それまでの「安い客は取らない」という主張を曲げて、毎晩のように手紙を書きその客が登楼するたびに手渡すようになる。

どうして、そこまで森は恋愛や恋をする娼妓の姿を肯定的に描くのだろうか。ひとつの答えは、大巻から恋の話しを聞いた晩についての森のモノローグのなかにある。

忘れもしない去年の二月十四日、嵐の様な強い風の吹いていた夜だった。私は彼女の部屋で彼女の初恋の話を聞いた……そうした話をする、きかない気の彼女も常の元気に似合わず沈みがちになるのだった。彼女と私はこの時初めて、こうした社会から全然かけはなれた気持ちになつてしまひみ話し合つた（傍線強調引用者）⁽⁶⁴⁾

森はかつて『婦女界』（一九二六年七月号）に発表した手記のなかで、遊廓での生活について「人間のする事でなく、ちくしょうにもおとつた生活」⁽⁶⁵⁾と書いている。その遊廓から初めて「かけはなれた気持ち」になつたのが、大巻の初恋をきいた晩である。つまり、森にとつて恋愛について語ることは、日々削られていく「人間性」を取り戻すような行為としてある。たとえ自由のない遊廓のなかにおいても、恋愛について語り、実際に恋のために生きる、そんな女性たちの精神の自由を森は肯定的に描くのである。

一方で、娼妓を「墮落した」「身持ちの悪い」女性とみなすような社会的な視線を森がつねに意識していることも間違いない。「新駒花魁の逃亡」では、娼妓三人と下新（妓楼から送られる娼妓の付き人）で外に芝居を見に行くというシチュエーションもあり、外部からの視線を非常に気にする森の自身の様子が描かれている。

皆んなそろつて束髪で気持はいいが、下新がいるために、やっぱり吉原の花魁だという眼で町の人に見られやしないかと思うと又さすがに腹立たしくなつた⁽⁶⁶⁾

「町へ行つたら決して妓名など呼びっこなしね、煙草も人ごみの中ではお互いに我慢しッこよ。」なぞと約束して家を出たのだった⁽⁶⁷⁾

き色いお愛想のいい女の声を耳にしながら私達は二階へ上がった。そこにはちょうどいい事に他の客は一人もいなかった⁽⁶⁸⁾

普段とは違う束髪にしているのに下新がいるせいで花魁（吉原の花魁のことだけを指す）と気づかれるのではないかと腹立たしい気持ちになったり、妓名を呼び合うことや煙草を我慢したり、他の客がいらないことにほっとしたりする、という描写からは、娼妓であるということの「負い目」のような感覚を読み取ることができる。序で、「浅ましい稼業」「遊女生活の惨めさ」「不幸な私達姉妹」「臆面もなく」「恥さらし」「この賤しい、無力な、遊女上がり」と否定的な言葉を並べていたように、森にとつて娼妓であることは、「最も賤しい稼業」⁽⁶⁹⁾なのである。

だからこそ、そのようななかにも、一途な恋の記憶や、将来の出会いに期待する女性たちの姿は、森にとつて執筆の上で重要なモチーフになるのだろう。恋について語ることを通して、娼妓である（あった）というステイグマを離れて、普通の若い女性と共通するような経験に光をあてることができる。ちょうど大巻と恋の話をした晩のように。

（四）たすけあう娼妓たち

前述の松島花魁のようにだれからもうとんじられる花魁がいたり、日常にお互いの稼ぎや客を監視し合うような要素はありつつも、森がつねに感動しつつ描くのは女性たちの優しさとたすけあいである。

たとえば、女性たちは日常的に色々なものをわけあっている。それは、まず文字通り物質的なもののシェアという形で描かれる。「四時のご飯の時、山崎さんから頂いた玉子をみんなで分けて食べたら、十五の玉子が一つ残った」⁽⁷⁰⁾。前述の「吉原一の花魁」の力弥は、客の洋服から財布を抜き出して森に三円渡すと「花がけでも何でもお買い。借金なしなんかする事はないよ。廓の商売人なんかみんな悪銭を取って儲けているだから返す事はないよ」⁽⁷¹⁾とまるで自分のお金のように気前よく客のお金を配るのだ。

もつとも多くのたすけあいが描かれるのは、吉原病院入院中のエピソードである。「娼妓の出世」には、森がそこで出会った千住遊廓の千鳥という娼妓が登場する。吉原の花魁たちが千住遊廓の娼妓のことを「宿場女郎」と一段低く見ているということに反感をいだく森は、千鳥と積極的に親しくする。同エッセーでは、もう病院の外に出ることを半ば諦めている千鳥が森に言葉を託すシーンが描写される。千鳥は、もしこのまま死んだら吉原梅吉楼の都と梅龍にお礼を

伝えてほしいと森にいう。脚気で医者もろくに診てくれない中、二ヶ月も二人が小豆煮やそば粉をこっそり食べさせ、小遣い銭も差し入れてくれたたすけあという。「妾、一生忘れないの。都さんに、梅龍さんをね。死んでも忘れないわ。妾、もうしゃばには出られないと諦めているの」⁽⁷²⁾という千鳥に対して森はうまくなくさめの言葉を返すことができない。「あんたばかりが不仕合わせじゃないんですもの。みんな誰もかも、ここにいる人たちは不運なんですからね……」⁽⁷³⁾という場面でエッセーは終わる。森は、「私はあらゆる努力をしても、それだけしかいうことができなかった」⁽⁷⁴⁾と自らの無力さを責めるように書いているが、たとえ「不十分」と感じていても、そのような言葉をかけあうことが、過酷な環境を生き抜くためにきわめて重要だったということを感じさせる一場面である。

長編エッセーである「吉原病院」では、女性たちの相互のたすけあいがより具体的にはっきりと描かれている。

室へ帰ると、又、千代駒さんの所と澤田さんの所から手紙が来ていた。患者達はどうしてこう親切なのだろう。同病相憐れむとはよくいったものだ。楼から面会に来て見舞い品をもらうと決して一人では食べれない。室中のみんなに分けてやる。そして互いに病気の事を心配し合い、お互いの涙を拭い合おうとするのだ。他の人の傷口を見てやって、自分のもののように心配している所なぞ見ると、私は独りでに涙ぐむ⁽⁷⁵⁾。

心配しあい、お互いに涙をぬぐう女性たちをみて涙ぐむという描写からは、きわめて高い共感能力を持った書き手としての森の姿が伝わってくるのと同時に、堀で囲われた遊廓のなかの病院という二重の囲いのなかにいる女性たちの生き抜くための実践が読み取れる。借金や治らない病氣への絶望、手術への不安などをかかえた女性たちは言葉を交わし合い、自分たちの境遇を哀れむ歌を毎日のように歌うことを通して、お互いに力づけ合っている。

花魁たちはまた『病院の唄』を唄い出した。彼女達は毎日――日に幾度も――この唄を合唱する。一日として欠かした事はない。病院の患者でこの歌を知らないものはない位だ。泣いて唄い、唄っては泣く、それは彼女

らの日課なのだ。

人も知ったる吉原の

所は仲の町病院で

両親揃うておりながら

お側で看病はできぬとは

みなさん妾のふりを見て

あわや不憫と思し召せ

よもやこんなになろうとは

夢更妾は知らなんだ

いつの検査に出てみても

退院する日は更けない

無理のお上のお規則で

病院住まいは情けない

長い廊下も血の涙

こうして暮らすも親のため

山中育ちの私でも

病院の南京飯食べ飽きた

ここで妾が死んだなら

両親様は嘆くだろう⁽⁷⁶⁾

歌のなかで、女性たちは面会も自由に許されない病院の不自由な状況を嘆き、不人情なご内所（楼主のこと）への恨み言を吐き、親のためにこのような境遇に陥っている自分自身を哀れむ。その根底に響くのは、そのような不条理を許している社会への憤りである。森は「彼女ら」と少し距離をおいて書いているが、おそらく森もまたその歌に涙し、ともに歌うという行為に慰められたのだろう。吉原病院生活の悲哀を歌う、その「吉原病院の歌」の歌詞は、『婦人公論』（一九二六年一月号）に掲載された最初の原稿には載っていなかったものである。雑誌掲載時には文字数の関係もあったのかもしれないが、この歌の歌詞もまた森が『春駒日記』を出版する際に書き留めておきたかったものであることは間違いない。

この論文を書くにあたって、「吉原病院の歌」がどのような歌であったのか調べようと試みたが、そのメロディをみつけることはできなかった。譜面があるわけでもなく、録音があるわけでもない歌は、森が書き留めたことによって、その歌詞だけは現在の時間に伝わった。悲惨な境遇を歌うことで、言葉を響かせ合うことで、生き抜こうとする女性たちの姿は、森がこの作品を通してもしっかり描きかけたもののひとつであると感ずる。

おわりに――語りによる生き直しの時間、あるいは託された物語を紡ぐこと
本論では、森光子という人の足跡を史料のなかにたどり、二作目の『春駒日記』で森が描き出した世界がどのようなものであったのかをみてきた。

今回、『春駒日記』を読み込んでみてあらためて思うのは、これまでこの作品を取り上げた研究がなかった理由は、そもそもこの作品の意味を読み取る視点が存在していなかったからなのではないかということである。みてきたように、同書で森が描き出す世界は、残酷な楼主に苦しめられる娼妓、悪魔のような客、足を引っ張り合う花魁という一面的な遊廓のイメージではとらえきれない広がりがある。その意味で、研究の対象にならなかったということの背景には、山崎朋子がかつて「悲惨な境遇の報告とそれに対する研究者の同情のみが強調されて、彼女らの〈人間的価値〉についてはまったく切り捨てられていた」⁽⁷⁷⁾と批判的に書いた、娼婦の人間性への無関心という問題が、現在でも依然として研究者の側に存在しているようにも感じられる。

森は、一作目の『光明に芽ぐむ日』の執筆時を回想して、新聞につきぎのように書いている。

あの爽やかな秋にただ一人ぼつねんと終日庭のざくろの美しい輝きに見惚れて、朋輩達に電話でもかけてみたい様な気持ちになったりしたこともありました……ひんやりした夜気に包まれた町を流す新内の爪ひきに聞き惚れて、そつと二人で抱き合つて添寝した千代駒さんの青白い頬が、涙でぬれていたのもやはり秋だった。こんなことも思い出されて、淋しくなったりもしました⁽⁷⁸⁾。

つまり、遊廓という空間は、森にとって地獄のような日々の記憶でもあるけ

れど、同時に同僚への愛着や交流の喜びもつまった十代の終わりから二十代へと過した日常の風景である。見つめることは苦痛に満ちていても、経験を自分の言葉で整理しながら語り直すことは、圧倒的な暴力のなかでいったん奪われた時間を、自分自身の時間として再び生き直すことになる。ときには仲のよかった客と歌った賛美歌を思い出し、二度と会うことのない大巻のすてきな笑顔を懐かしく思い、力弥の豪快な台詞に溜飲を下げ、松島花魁の憎たらしい顔に毒を吐く——森にとつて「書くこと」は、そんなたどり直しの経験だったのではないか。

とはいえ、語ることがつねに「無垢な犠牲者」／「墮落した醜業婦」という二極化した娼妓イメージにそってほとんど強制的に振り分けられてしまう社会的なバイアスのもとで遊廓の経験を描くのはきわめて難しかったであろうことも想像に難くない。その意味で、森だけでなく娼妓は自らの経験を（特に喜びに関しては）語ることを「禁じられた」存在であるといえる。自らの喜びを語ることを「禁じられた」存在として森は注意深く、客や同僚から伝え聞いた（託された）物語を語る、という形で、語り手である森自身の「生」や「喜び」を密かに表現した。森が好意を寄せる力弥や大巻は、わたしたちはもつと自由だと、無力ではない、そして強く、美しいのだ、と静かに語っているようだ。それは、徹底して奪われているからこそ、それでもなお奪われないものがある、という悲痛な叫びのようでもある。あるいは、そのようなたくさんの魅力的な女性たちの物語が重なりあう地点に、かつて生きた森自身の姿を、『春駒日記』という作品を通して描き出すことが、森の密かな目的であったのかもしれない。

しかし、同時代的には、森の声は遊廓の告発という一面的な部分しか聞かれることがなかった。第一章でふれたように『光明に芽ぐむ日』の残酷なエピソードは娼娼運動家やのちの歴史研究のなかでも紹介されているが、『春駒日記』で描かれるさまざまな女性たちの姿に光があてられることはなかった。そのことが、優れた書き手としての森の可能性を閉ざしてしまったように思えてならない。遊廓の改善という世論が静まり、娼妓たちの「闘争」の時代が過ぎ去ったあと、もはや「元娼妓」である森に関心が集まることはなかった。

今回は『春駒日記』をめぐるはじめの論考ということで、全篇をとりあげて論じるという形をとったが、同書のなかには、遊廓病院における女性たちの日常を描く長編の「吉原病院」や、その吉原病院で出会った娼妓との対話にふ

れた「娼妓の出世」など、作品批評の対象としての奥行きを持つ作品も多い。巻末に掲載された千代駒の手紙も、『光明に芽ぐむ日』という当事者の手による告発の本が、具体的にどのような遊廓のなかの女性たちに受け止められたのか描き出すきわめて興味深いものである。今後の研究の展開に期待したい。

引用・参考文献（五十音順）

伊藤秀吉「紅灯下の彼女の生活」実業之日本社、一九三一年。

小野沢あかね「国際連盟における婦人及び児童売買禁止問題と日本の売春問題

——一九二〇年代を中心として」『総合研究第三号 津田塾大学国際関係研

究所二〇周年記念論集』津田塾大学国際関係研究所、一九九五年。

外務省編『外務省年鑑 式』一九二七年。

貴司山治「遺稿 私の文学史」『暖流 第十七号』暖流の会、一九七七年二月。

貴司山治研究会編『貴司山治全日記DVD版』不二出版。

紀田順一郎『東京の下層社会』新潮社、一九九〇年↓ちくま学芸文庫、二〇〇

〇年。

草間八十雄『灯の女閨の女』玄林社、一九三七年。

小林鶯里「劣情挑発的淫書」『図書月報』一九一三年八月号。

斉藤美奈子「解説」『吉原花魁日記 光明に芽ぐむ日』朝日文庫、二〇一〇年。

谷川健一編『近代民衆の記録三 娼妓』新人物往来社、一九六八年。

長尾半平「浅草女子青年団の為に悲しむ」『廓清』一九二八年六月号。

日本新聞研究所編『日本新聞年鑑 昭和八年版』日本新聞研究所、一九三二年。

一九三二年十一月の情報を掲載。

——『日本新聞年鑑 昭和九年版』日本新聞研究所、一九三三年。一九三

三年二月の情報を掲載。

松村喬子「地獄の反逆者 人生記録五」『女人芸術』一九二九年八月号。

森光子「廓を脱出して白蓮夫人に救われるまで」『婦女界』一九二六年七月号

——『光明に芽ぐむ日——初見世から脱出まで——』文化生活研究会、一

九二六年。

——『遊女の生活記録を著して』『読売新聞』一九二六年二月一八日——

〇日。

——『春駒日記』文化生活研究会、一九二七年。

無署名記事「廃娼日情況」『廓清』一九二七年一月号。

無署名記事『同盟旬報』一九三八年二月下旬号、第二卷第六号。

山崎朋子『サンダカン八番娼館――底辺女性史・序章』筑摩書房、一九七二年。

山家悠平『遊廓のストライキ――女性たちの二十世紀・序説』共和国、二〇一五年。

――「遊廓に生きるたくましい女たち――松村喬子「地獄の反逆者」(一九二九)とアクチュアリティ」『京都造形芸術大学紀要 Genesis (22)』二〇一八年。

渡辺みえこ「解説」高良留美子、岩見照代編『女性のみた近代Ⅱ 女と労働

(三)』ゆまに書房、二〇〇四年。

和田芳子『遊女物語』三芳屋、一九一三年。

注

- (1) 森光子「光明に芽ぐむ日――初見世から脱出まで――」文化生活研究会、一九二六年、四一三頁。以後引用にあたって、新字・新かなで統一し、代名詞・副詞等に用いられている一部の漢字をかなに改めた。送りがなは原則として原文のままとし、適宜句読点を整理した。
- (2) 年季の途中で、自らの意志で廃業すること。一九〇〇年の娼妓取締規則で法的にも認められた権利だったが、実際には楼主が妨害したり、警察が容易に認めなかったりということもあり、簡単ではなかった。
- (3) 森光子『吉原花魁日記 光明に芽ぐむ日』朝日文庫、二〇一〇年、三一五頁、斉藤美奈子による解説。
- (4) 森前掲『光明に芽ぐむ日――初見世から脱出まで――』、六一頁。
- (5) たとえば、森光子『春駒日記』(高良留美子、岩見照代編『女性のみた近代Ⅱ 女と労働』ゆまに書房、二〇〇四年収録)における渡辺みえこによる解説など。
- (6) 森光子『春駒日記』文化生活研究会、一九二七年、序の一頁。
- (7) 小野沢あかね「国際連盟における婦人及び児童売買禁止問題と日本の売春問題――一九二〇年代を中心として」『総合研究第三号 津田塾大学国際関係研究所二〇周年記念論集』津田塾大学国際関係研究所、一九九五年、一三六、一三七頁。ちなみに留保条件は、二一歳未満という年齢と(日本の公

娼制度は一八歳から娼妓登録可能であった、適応の対象から朝鮮、台湾、関東租借地、樺太といった植民者は除外するというものである。

(8) 山家悠平『遊廓のストライキ――女性たちの二十世紀・序説』共和国、二〇一五年、一〇七―一〇頁。

(9) 『東京朝日新聞』一九二六年四月二七日。

(10) この記事には花山と逃走を試みたところがあるが、森自身の記述では花山は単独で逃走し、行方がわからない、ということになっている(森前掲『光明に芽ぐむ日――初見世から脱出まで――』、一八六―二〇頁)。

(11) 『東京朝日新聞』一九二六年四月二七日。

(12) 山家前掲『遊廓のストライキ――女性たちの二十世紀・序説』、一一三―一三四頁。

(13) 愛知県の新聞紙『新愛知』(一九二六年六月一七日)に掲載された『婦女界』七月号の広告。

(14) 松村喬子「地獄の反逆者 人生記録五」『女人芸術』一九二九年八月号、一八頁。

(15) 松村喬子について詳しくは、山家悠平「遊廓に生きるたくましい女たち――松村喬子「地獄の反逆者」(一九二九)とアクチュアリティ」『京都造形芸術大学紀要 Genesis (23)』二〇一八年参照。

(16) 森光子「遊女の生活記録を著して(上)」『読売新聞』一九二六年二月一八日。

(17) 森光子「遊女の生活記録を著して(中)」『読売新聞』一九二六年二月一九日。

(18) 森前掲『春駒日記』、三二八頁。

(19) 無署名記事「廃娼日情況」『廓清』一九二七年一月号、三九頁。

(20) 外務省編『外務省年鑑 貳』一九二七年、二二五頁。

(21) 『長崎新聞』一九二八年五月二八日。

(22) 長尾半平「浅草女子青年団の為に悲しむ」『廓清』一九二八年六月号、一一頁。

(23) 前述の「廓を脱出して白蓮夫人に救われるまで」にも少し離れた場所から撮影された森の写真が掲載されているが薄暗くはつきりとは見えない。

(24) 無署名記事「縁は異なるもの 何が二人を結んだか」『読売新聞』一九二九年

- (25) 無署名記事「何処へ行く 杉山さと子・北里氏・春駒諸君の行方は？」『新青年』一九三〇年八月号、一七八頁。記事は貴司の家を高円寺としているが吉祥寺の誤りである。
同前、一七九頁。
- (26) 貴司山治の遺稿にはつぎのような記述がある。「柳原白蓮が姪の古井徳子（今、橋崎すが子）をつれて遊びにくるようになったのも、そのころである（一九二九年頃——引用者注）。やがて白蓮のもとに身をかくしていた元吉原の遊女春駒が、吉原からの追手を逃れて拙宅へ逃げ込んできた。かの女は「春駒日記」というのを出版して評判の女だったが、およそ名とは似つかぬ色の黒い、眼のぎよろりとした痩せた女で、そのあとからかの女の夫である西野哲太郎がくるようになった。西野は、外務省の属吏だったが、遊女春駒を白由廃業させた演出者で、そのため外務省をクビになり、社会運動のつもりでそのあとも、自由廃業の手引きをやつていて、吉原の暴力団に追いかけて廻されていた」（貴司山治「遺稿 私の文学史」『暖流 第十七号』暖流の会、一九二七年二月、五三頁）。
- (27) 吉野作造『吉野作造選集（一五）日記三—昭和二—七日記』岩波書店、一九九六年、二六四頁。
- (28) 日本新聞研究所編『日本新聞年鑑』日本新聞研究所、一九三二年、一〇二頁（同年鑑の情報は一九三一年一月末時点）。同年鑑、一九三三年、一〇九頁（一九三三年二月現在）。以降は、西野の名前は登場しない。
- (29) 『東京朝日新聞』一九三四年五月三日夕刊。
- (30) 『同盟旬報』一九三八年二月下旬号、第二卷第六号、五二五頁。
- (31) 貴司山治研究会編『貴司山治全日記DVD版』不二出版、二〇一一年。
- (32) 伊藤秀吉『紅灯下の彼女の生活』実業之日本社、一九三一年、二九二頁。
- (33) 紀田順一郎『東京の下層社会』新潮社、一九九〇年→ちくま学芸文庫、二〇〇〇年、一六二頁。
- (34) 同前、一六七頁。
- (35) 草間八十雄『灯の女闇の女』玄林社、一九三七年、一〇〇—一〇三頁。
- (36) 森前掲『春駒日記』、序の五頁。
- (37) 同前、序の一、二頁。
- (38) 同前、一八八頁。
- (39) 同前、序の一頁。
- (40) 小林鶯里「劣情挑発的淫書」『図書月報』一九一三年八月号、一五六、一五七頁。
- (41) 『若手日報』一九二六年九月二五日。記事では、廃業しても行く場所がない、と嘆く娼妓の投書を紹介している。
- (42) 森前掲『光明に芽ぐむ日——初見世から脱出まで——』、あとがきの一頁。
- (43) 森前掲『春駒日記』、序の二、三頁。
- (44) 森前掲『春駒日記』、三九頁。
- (45) 同前、四三頁。
- (46) 同前、五四頁。
- (47) 同前、五五頁。
- (48) 同前、一五八頁。
- (49) 同前、二六八、二六九頁。
- (50) 同前、二二二頁。
- (51) 同前、九二頁。
- (52) 同前。
- (53) 同前、二三頁。
- (54) 同前、一二三頁。
- (55) 同前、九八頁。
- (56) 同前、一八九頁。
- (57) 同前、一九四、一九五頁。
- (58) 同前、一二三頁。
- (59) 同前、一二二頁。
- (60) 同前、一三四頁。
- (61) 同前、四一、四二頁。
- (62) 同前、一三二頁。
- (63) 同前、一二四、一二五頁。
- (64) 森光子「廓を脱出して白蓮夫人に救われるまで」『婦女界』一九二六年七月号、一七〇頁。
- (65) 森前掲『春駒日記』、三頁。

- (78) (77) (76) (75) (74) (73) (72) (71) (70) (69) (68) (67)
- 同前、六頁。
同前、八頁。
同前、一一五頁。
同前、一五六頁。
同前、一九六頁。
同前、二一五頁。
同前、二一六頁。
同前。
同前、二四五頁。
同前、二七九―二八二頁。
山崎朋子『サンダカン八番娼館―底辺女性史・序章』筑摩書房、一九七二年、二五五頁。
森光子「『光明に芽ぐむ日』遊女の生活記録を著して（中）」「読売新聞」一九二六年二月二〇日。紙面には（中）とあるが（下）の誤植である。

In the Afterglow of the Era of Struggle: Daily Life in a Yoshiwara Brothel as Depicted in Mitsuko Mori's *Harukoma Nikki*

Yuhei YAMBE

Summary

After escaping from the Yoshiwara brothel, Chokinka, in April 1926, Mitsuko Mori (also known as Harukoma) stopped working in Yoshiwara, and with support from labor activists was able to publish two books. In this paper, I draw on historical documents in order to trace the footsteps of Mitsuko Mori after she left the brothel, something which has not been studied to date. I then attempt a close reading of her second book, *Harukoma Nikki* (*Harukoma Diary*). Unlike her first book, *Kōmyō ni megumu hi* (*The Day I Find the Light*), which was published at a time when public opinion calling for the abolition of public prostitution system was on the rise, and had the unifying theme of denouncing the cruel conditions of brothels, *Harukoma Nikki* is a collection of miscellaneous episodes from brothel life and has not received any attention to date.

First, drawing on newly discovered historical documents, I was able to trace the footsteps of Mitsuko Mori up to 1930. It

is now known that Mori married Tetsutaro Nishino, a Ministry of Foreign Affairs official, in the spring of 1927, and that she wrote her second book while also participating in the women's labor movement.

In *Harukoma Nikki*, Mori describes diverse communications with customers and colleagues, strong-willed sex workers who talk back to the owners, Mori's longing for love and her colleagues, giving expression to the lives of women who are trying to overcome the harsh environment through exchanging words and supporting one another.

The brothel is not only a hellish place for Mori, but also a place filled with memories of her attachments to and interactions with her colleagues, one where she spent her late teens and early twenties. I concluded that for Mori, to depict her past in the brothel was to give it new life through retracing the experience of having had her life "stolen" from her in conditions of extreme exploitation.